〈青森県史〉の窓 15

ダイシコ（大師講）とクリスマス

清野耕司
（県民生活文化課県史編さんグループ）

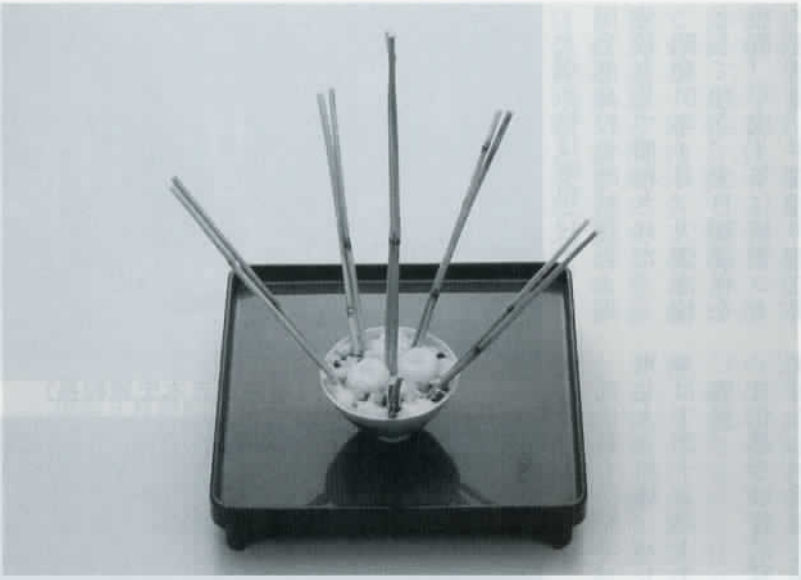
旧暦の11月23日には、青森県内でダイシコ、デンシコ、デシコなどと呼ばれる家毎の年中行事が、かつては広く行われていた。

青森県のダイシコは雪が本格的に降り始めるころの行事で、小豆粥などを作り、カヤや桃の木の枝などで作った長い箸を添えて、神様に供えた。ダイシコサマは貧乏で子だくさんなので、「長い箸を使って子供たちに食べさせるのだ」などといった。また、この日の夜は「ダイシコ吹き」ともいい、天候が荒れて吹雪になったという。「昔、一人の貧しい老女の家へ、この日の晩にダイシ様が訪ねて来た。何か食べ物をさし上げたいと思っても家には何一つない。悪いこととは知りつつも、隣家の田に行って掛け稲の穂を盗んで来た。ダイシ様はその志をあわれんで、雪を降らせ老女の足跡を隠してやった。」というような伝説が東北地方を中心に語られるが、県内では、とにかく荒れるといわれている。

ダイシ様は弘法大師とする地域も多く「大師講」の文字を当てるのが一般的だが、本来、ダイシ様（青森ではダイシコサマ）とは一年中で最も太陽の力が弱まるこの時期（冬至に近い）に、太陽の再生と豊穣をもたらすためにやって来る神様とも考えられている。

ところで、話題は180度転回する。旧暦11月23日は冬至に近く、つまりはクリスマスにも近いのである。クリスマスの起源をたどるとキリスト教以前の古代ヨーロッパの信仰や習俗にまでさかのぼれるという。つまり、新暦12月25日をキリスト生誕の日として祝う以前の、太陽を神としてあがめ、その復活をはかる日（冬至）の祭りや古代ローマの収穫祭などがクリスマスの母胎らしいのである。期せずしてダイシコとクリスマスが『衰えた太陽の再生・復活』のキーワードでかすかにつながった。そして、この季節に村々を訪れて人々に祝福をもたらす神への信仰は、日本でも仏教以前の古いものと考えられている。

イブの夜に家々を訪れるサンタクロースは、奇跡を起こし貧しい人を助ける伝説の人、聖・ニコラウスがモデルといわれるが、さらに古くは、例えばフィンランドで「ヨウルブッキ」と呼ばれ、父親や近所の人がそれに扮し、子供たちがまだ起きているうちに「この家には良い子はいるかな？」と戸口をトントンたたいてやってくるそうである。ここまでくると、話の飛躍ついでに、お隣のナマハゲまでが「悪い子はいねがー」と登場して来そうである。真冬の吹雪の夜に訪れる神への信仰は、多くの民族に共通した生命力の復活と豊穣への願いに通じているのではないだろうか。



ダイシコの小豆粥（むつ市川内町小倉平）